
Ⅱ 調査結果の概要

1 保護者の生活状況

経済的な状況について、等価世帯収入の水準により分類したところ、「中央値の2分の1未満」に該当するのは小学5年生世帯で6.6%、中学2年生世帯で8.2%、「中央値の2分の1以上中央値未満」に該当するのは、小学5年生世帯で35.1%、中学2年生世帯で39.2%となっている。親の婚姻状況から世帯の状況を分類したところ、「ひとり親世帯」は小学5年生世帯で7.2%、中学2年生世帯で10.2%となっている。等価世帯収入の水準には、世帯の状況や親の最終学歴、就労状況等が影響しており、「ひとり親世帯」や親の学歴が低い場合、正社員でない場合では等価世帯収入の水準が低くなる傾向がみられる。

現在の暮らしの状況について、「中央値の2分の1未満」の世帯や「ひとり親世帯」では『苦しい』との回答が約4～6割となっており、「中央値以上」や「ふたり親世帯」と比べて大きな差がみられる。また、収入の水準が低い世帯や「ひとり親世帯」では、食料や衣服を買えなかったことや公共料金の未払いになったことがある割合が高くなっており、収入の水準が最も低い「中央値の2分の1未満」の世帯では、食料や衣服が買えなかったことがある割合は3割以上となっている。

子どもが進むと思う進学先については、収入の水準が低い世帯や「ひとり親世帯」では『大学またはそれ以上』を希望する割合が低くなっている。親の最終学歴も関連しており、収入が低い世帯であっても、親が「いずれかが、大学またはそれ以上」の場合は子どもの進学先も『大学またはそれ以上』の回答割合が高く、親が「いずれかが、大学またはそれ以上」でない場合は子どもの進学先も『大学またはそれ以上』の回答割合が低くなっている。子どもの進学先について、『高校まで』と考える理由として、収入の水準が低い世帯やひとり親世帯では「家庭の経済的な状況から考えて」と回答する割合が高くなっている。

保護者の心理的な状態について、収入の水準が低い世帯や「ひとり親世帯」では、「うつ・不安障害相当」と考えられる割合は高くなっており、生活に対する満足度については低くなっている。

2 子どもの生活状況

ふだんの勉強の仕方について、「塾で勉強する」が国と比較すると低く、1日あたりの勉強時間も国と比較すると短くなっている。等価世帯収入の水準が低い世帯や「ひとり親世帯」では、「塾で勉強する」の割合が低く、1日あたりの勉強時間も短くなっており、クラス内での成績も『下のほう』と回答する割合が高くなっている。学校の授業の理解度についても、収入の水準が低い世帯や「ひとり親世帯」では『わからない』の回答が高くなっており、等価世帯収入の水準が高い世帯や「ふたり親世帯」に比べて、早い段階から授業がわからなくなる傾向がみられる。授業がよく分かり、やりたくなる学習環境については、収入の水準が低い世帯や「ひとり親世帯」では「友達と教えあう環境」の回答が高くなっている。

進学希望について、『大学またはそれ以上』との回答が国と比べて低く、等価世帯収入の水準が低い世帯や「ひとり親世帯」ほど低くなっている。

部活動等への参加状況は、「ひとり親世帯」では「参加していない」の割合が高くなっている。部活動に参加していない理由としては、「費用がかかるから」と回答した割合が高くなる傾向がみられる。

日常的な生活の状況について、等価世帯収入の水準が低い世帯や「ひとり親世帯」では、毎日朝食を食べている割合や平日同じ時間に寝ている割合が低くなっている。また、生活満足度について、等価世帯収入の水準が低い世帯や「ひとり親世帯」のほうが低くなっている。

子どもの心理的な状況について、収入の水準が低い世帯や「ひとり親世帯」では、「情緒の問題」や「仲間関係の問題」、「向社会性」のスコアが高く、「逆境体験」を経験している割合も高くなっている。また、「逆境体験」を経験している場合には、生活満足度が低くなる傾向がみられる。

ヤングケアラーの実態について、言葉の認知度は収入の水準が低い世帯や「ひとり親世帯」では、「聞いたことはない」は低くなる傾向がみられる。ヤングケアラーにあてはまると思うかについて、「あてはまる」との回答は、収入や世帯の状況に関わらず1～2%程度となっているが、収入の水準が低い世帯や「ひとり親世帯」では、「分からない」との回答が高くなっている。家族の世話の状況について、等価世帯収入の水準が低い世帯や「ひとり親世帯」では、「世話をしている人はいない」の割合が低くなっており、家族の世話をすることで、「家庭での学習」がやりたくてもできない傾向にある。あると良いお手伝いや支援について、保護者・子どものいずれも「放課後や休みの日に気軽に遊びに行ける場所」との回答が高くなっている。

3 新型コロナウイルス感染症の影響

新型コロナウイルス感染症の影響について、小学5年生世帯、中学2年生世帯ともに「生活に必要な支出の変化」で「増えた」と回答した割合が高くなっている。

子どもへの影響では、「家族で外食する回数」、「家族で旅行する回数」で「減った」と回答した割合が高くなっているが、「家族で家で過ごす時間」は「増えた」と回答した割合が高くなっている。

4 支援の利用状況や効果等

保護者の支援制度の利用状況について、等価世帯収入の水準が「中央値の2分の1未満」の世帯や「ひとり親世帯」では、「就学援助」や「児童扶養手当」の利用は4～7割前後となっているが、「生活保護」、「生活困窮者の自立支援相談窓口」、「母子家庭等就業・自立支援センター」の利用は1割以下となっている。

子どもの居場所の利用状況について、「平日の夜や休日を過ごすことができる場所」は、4～5割の子どもが利用しており、国と比較して高くなっており、利用による変化として、小学5年生では「友だちが増えた」、中学2年生では「勉強する時間が増えた」が高くなっている。また、「勉強を無料でみてる場所」については、利用している子どもは1割未満だが、「あれば利用したいと思う」は3～4割となっている。

5 広島県や府中町の子ども政策への希望

広島県の子どもに関する取組で特に力を入れてほしいと思うことについて、保護者・子どものいずれについても「小学校・中学校・高校で、将来社会で活躍するために必要な力をつける」が最も高くなっており、選んだ理由としては、塾に行かなくても進学できる力を身につけてほしい、基礎学力の向上、コミュニケーション能力の向上、社会保険などの制度やお金に対する教育を増やしてほしいという意見がみられる。収入の水準が低い世帯や「ひとり親世帯」では、「ひとり親の子どもやその家族への支援」が高くなっており、養育費を取り決めても支払われない、支援格差がおきているので収入による限度額の見直し、受講料や授業料の支援といった経済的支援の意見が多くみられる。

6 総括（求められる支援や今後の課題）

【課題①学習の状況】

府中町では、中学2年生は国や広島県と比べて、塾で勉強する子どもが少なく、学校外の勉強時間も短く、大学への進学希望者も少ない。それに対し、小学5年生は広島県と比べてやや高い結果となっている。小学5年生と中学2年生とで学習状況に差がみられる。広島県の子どもに関する取組で特に力を入れてほしいと思うことについては、保護者・子どものいずれについても「小学校・中学校・高校で、将来社会で活躍するために必要な力をつける」が最も高く、保護者の意見として、「塾に通わなくても学力をつけてほしい」という意見がみられており、基礎的な学力を学校の授業で身につけることができるように、学校教育に力を入れていく必要がある。また、新型コロナウイルス感染症の拡大やICT等の技術の発展など、社会環境が目まぐるしく変わっていく中、子どもたちが将来社会に出た時に本当に役に立つ知識や能力を身につけられるように学校での学習内容を見直していくことが求められる。

【課題②悩みがあっても相談できない人がいる】

困っているときに相談できる人について、子どもに尋ねたところ、小学5年生で3.8%、中学2年生で7.6%が「誰にも相談できない、相談したくない」と回答している。保護者についても、子育てに関する相談で頼れる人について、小学5年生の保護者で2.0%、中学2年生の保護者で3.8%が「いない」と回答している。

これらの相談できる人の有無で生活満足度をみると、相談できる人がいない場合、相談できる人がいる人に比べて、生活満足度の平均点が2～3点前後ほど低くなっており、貧困層やひとり親世帯の生活満足度の平均と比べても低くなっていることが分かった。

近年、子どもの貧困を初めとし、いじめ・不登校・虐待・障害・ヤングケアラーなど、子育て世帯を取り巻く環境においては様々な課題が顕在化してきており、個人が抱える課題も複雑化している。子どもや子育てを行う保護者が課題を抱え込んで孤独になってしまわないように、相談できる体制づくりを進めていく必要がある。